

凜々しく ～附属小温故創新～ 2018/1/9 No. 42 (新春特大号)

附属小の附属小たる所以 (ゆえん) 今年度全校授業を始めるにあたって

1月5日は小寒。そして1月20日の大寒から2月4日の立春までが1年で最も寒い季節になりますね。自分が小学生だった時代、よく朝会で二十四節季について校長先生が取り上げ、教室に戻った後に担任の先生からその意味を詳しく教えて貰ったように記憶しています。今は私たちが大人になって、このような意味をきちんと子どもたちに伝えていかなければならないのですから、本当に「光陰矢の如し」です。ちなみに冬は「殖(ふ)ゆ」からきた言葉だそうで、そこには、新しい命が増え、木の芽や花のつぼみが膨らんでいく季節という意味での「冬」というのだそうです。私は「冬」というと、どこか氷ついた冷たい世界をイメージしてしまいましたが、その意味を知ると「命の始まり」としての意味があるのですね。

1月18日から全校授業が始まります。1回目は社会科。授業者は三浦先生。かなり期待できますね。でも、全校授業となると三浦先生とはいえ、ひと味違います。それは、私たちもしっかり事前に勉強して三浦先生の授業を参観するからです。附属小の附属小たる所以はここにあります。全校授業は各教科部で何日も前から大学の先生と協同で指導案を作り上げ、研究部は当日外部から助言者の先生をお招きし、全ての担任が23学級を自習体制にして取り組む本校の一大イベントです。

今年も新年早々昔話で恐縮ですが、私が初めて全校授業に関わったのは平成4年の6月。当時も6月公開で、その公開を終えた数週間後に1回目の国語科の全校授業が行われました。当時の国語科の主任の先生が私の学年の副主任の先生で「公開よりこっちが大変」と何も分からない私につぶやいていたのを今でも懐かしく思い出します。

まず、驚いたのが、授業の数日前に配布されたB4で10ページはあろうかと思えるような指導案。「しっかり読み込んでくるんだよ。わからないことは質問して。」と教えてくださったのは隣の学級のK先生でした。

(でも、附属の国語の専門の先生方が作っている指導案。その通りに決まっている。)というのが正直な気持ちでした。その気持ちを裏付けするように、初めて参観した6年生の国語の授業は、私にとって今まで見たこともないような「素晴らしい授業」でした。

(ああ、いつか自分もこんな授業ができるようになりたい) と思ったものでした。

そんな気持ちで検討会へ参加。今の図書室に「会議室」があり、上座に司会(次に全校授業を行う教科部の主任)と教科部が座ります。席に指定はなく自由座席。午後3時、検討会のスタートです。

まず、驚いたのは授業の全体記録と3人の抽出時記録が誌面で出てきたことでした。それを見たときに、

(私はだめだ。これはできない) と思いました。

その理由は、記録している先生方の子どもの反応を見取る力の鋭さです。記録を読んだだけで授業での児童の様子が鮮やかに再現できるのです。当時は記録を研究部の先生方が担当していたので正直「指導部」でよかった、と思ったものでした。

検討会の序盤から国語科の研究に対して意見が飛び交います。

「主題の言葉の意味が分からない」「国語科で目指す授業はこれでよいのか」「この図はわかりづらい」「手立てはこれでよいのか」

本当に率直に何の縛りもなく意見を言う雰囲気には圧倒されました。

そして授業の検討会。内心、(指名されたら感想でも述べよう程度に考えていたのですが)、指名されるどころか、先輩方が次々と授業に対して意見を言うのであつとついう間に指導助言をもらう時間になっていました。私からすれば「素晴らしい授業」に感じたものが、一つ一つ先生方の視線で鋭くしかも客観的に崩されていくのです。このような当時の附属小の全校授業の検討会のあり方には感動すら覚えました。

午後3時から始まって5時を過ぎた頃には検討会は終わるのですが、ここはあくまで「第1部」。

その後ほとんど全員が北仙台へ移動して「慰労会」が始まります。そういう意味で授業者が本音で口を開くのはこの場面で、検討会であれだけ厳しい意見を言っていた先生方もここでは「お疲れ様」となるわけです。慰労会の最後は全校授業を行った教科部と次の教科部へエール。そして教頭先生が最後に締めてお開きとなります。当時、私も末席に参加させていただいて、全校授業の大変さを教えていただいたとともに、このように全ての附属小の先生から自分の授業を本気で見ていただける機会のありがたさを実感し、

(早く本当の意味で附属小の仲間に加えていただきたい。いつか自分も全校授業をしてみたい) という気持ちを強くしたものでした。

さらに、驚いたのは次の週。水曜日の定例の朝の打合わせのできごと。その全校授業の成果と課題が研究部から1ペーパーで報告されるのです。驚いたのはその報告内容ではなくて、あれだけの一大イベントを終えたのに、そのことも含めてこれを当然のことと受け止めている教官室の大人の雰囲気でした。(これが各教科続くから。) いつも親身になって相談にのっていただいたK先生の言葉が今も蘇ってきます。

時は平成30年。今年から研究部の提案で全校授業を1日1教科に戻しました。

実は、以前私が在籍していた時期に、夜の慰労会のあり方の見直しを行ったり、1日2教科での全校授業への改革が行われたりしました。先に述べたような思いもあったので、最初はととても違和感がありましたが、時代の流れというかやむを得ない「事情」もあったのだと今では推察しています。

そういう意味では今回の研究部の英断は大いに評価しますが、正直心配な面もあります。

それは、全校授業は授業者や教科部も大変だが、それを参観する我々の力量が問われる場でもあるからです。特に全校授業の指導案はよく読み込んで勉強しておかないと、検討会では「お客さん」になりかねません。そういう意味では私たちの「主体的な学び」の姿勢が大切です。

その全校授業の主体的な学びを支えるのが「研究部」です。ここからは研究主任と二人の研究副主任にお願いします。12月の社会科部と研究部の話し合いで何が話題になったのか、今回の社会科部の授業提案の目玉は何か、事前の告知をできるだけ早くして欲しいと思っています。指導案を早くいただければ勉強する時間があるのですが、それが難しいのであれば、研究部から何らかの形で情報提供をして欲しいと思います。定例の打ち合わせも削減した今、情報を共有する機会は減りました。そういう意味では、学校行事部が5日に「卒業式実施計画」を配布したことは9日の運営委員会を控えた準備としては大いに評価できます。1月18日の社会科をスタートに、音楽、図工、国語、算数、道徳と全校授業が続きます。やる方も大変ですが、そこに勉強して参加する方も実は大変だと私は思っています。

全校授業を創るのは研究同人としての学ぼうとする意識です。

全校授業がやりっぱなしの授業研究会の連続にならないようにここは研究部をリードする3人がいよいよ腹をくくって頑張りたいと思います。全校授業は附属小の附属小たる所以を支える場です。もちろん合唱の会やなかよし運動会も大切ですが、私たちが本来力を入れるのは共同研究しかも「全校授業」だと私は思います。ここからは研究部が本当の意味での主役。これまでの学校行事部の推進力や指導部の地道な取り組みに負けないような、校内研究の活性化を切に願います。

(文責：副校長 手代木)